

戦後卒業騎士のプロフィール

◇昭和48年以降分は「関大体育会誌」より転載

昭和25年

大森邦久

通称「モリさん」。戦後の部復活の功労者、初代主将。ボクサーからフェンサーへ転向、名古屋国体エペ個人準優勝。フランスの男優ジャンマレエにそっくりさん。当時、プロ級のダンスで多くの女性をシビレさせた。

昭和26年

石脇潤一(故人)

戦後復活時のマネージャー。2代目主将として功績大。練習熱心で後輩の面倒見が良かった人。「酒」の中でも白濁の「ドブロク」が大好き。練習も酒の勢いで楽々こなした人。会社経営に多忙であったが若くして他界。

昭和27年

木村雅昭

通称「ガーちゃん」。復活第3代目の主将。練習熱心で、上半身裸でファイトをするガッツエペマン。興奮したり、喜びを表すとき、自分や相手の体をピシッと叩く癖があった。

阪野悦子(旧姓上田)

通称「エッチちゃん」。バンカラ学生の中、当時のミス関大。フェンシング入部は彼女のたくましさを物語る。試合数が多ければ、全日本級の選手になっていたかも。

田中新次郎

通称「新さん」。軍隊帰りの学生で、同期より2歳ほど年上の人。戦後の兵庫県協会を故溝淵先輩と一緒に設立し発展させた人。永らく理事長、会長を務め、神戸のフェンサーから兄貴分として慕われた。

今村真(故人)

通称「今さん」。神戸ドッグ勤務時代、OB会費を貰いに行った時、いつも造船中の船上より会費+食事代+足代を呉れた顔を思い出します。時々、神戸YMCAへ顔を出されていたが、早く他界されたことが残念である。

昭和28年

千島不二雄

通称「チーやん」は有名人。主将を務め、スタイル重視のカッコいいフェンサー。関西個人フルーレ3位。国体の常連出場選手、ナンパの第一人者。レインコートの君と呼ばれ、アメリカの男優タイロンパワーに似た美男子だった。現在も…!

酒田清光

通称「3ちゃん」またの名を「サンコー」。名前の通りの大酒呑み。関西学生個人サーブル優勝。関西学生連盟の発足、学生フェンシングのPRに新聞社を奔走したことはあまり知られていない。

野呂彦三郎

通称「彦ベエ」。3兄弟が関大生。長兄が大森先輩の友人で、フェンシング入部のきっかけ。千島・酒田・野呂は「悪役三羽鳥」と呼ばれフェンシング界で知らぬものなし。関西個人エペ準優勝。千島と同じく国体の常連出場選手。

河合善介(故人)

通称「オシン」。名マネージャーとして、合宿・試合・遠征等に手腕を発揮。酒と女の両刀使い。この人の口癖「オエリャシェン」が懐かしい。卒業後、岡山で学生服の会社を経営したが若くして他界。

昭和29年

保本博三

真面目でナイーブな好青年であった。随分と上級生からしごかれていた。長い間OB会にもご無沙汰であったが、偶然にも所在確認。尼崎の塗料会社の常務取締役をされ、多忙な毎日を送られているとのこと。

昭和30年

桑原良次(旧姓近葉)

古武士的風貌で豪快な人。技より力で数々の試合を制した。この年代の共通点で、酒にはめっぽう強かった。

植田泰弘

人柄は柔和温厚で、後輩にとっては話しやすい人。この人も大変酒好きで、後輩たちをしたがえ、毎日の居酒屋通いが日課でした。

野上修

声が良くて、民謡を歌わせたら一座の人がシーンとなる程の本格派でした。酒を飲むと「金時の火事見舞い」のようでした。

神原甫

マネージャーとして抜群の腕を振るわれたが、大の酒好きでその方面に振るわれた腕の方がより大きかった。

信田鉄次

名前が示すように鉄の様に固くて、真面目で、もの静かな方。当時としては珍しく酒には弱かった。

道端正明

くそ真面目で、大変練習熱心な人。一高生を良く指導し育ての親でもある。

昭和31年

細川和男

通称「ホッソン」。剣と酒とマージャンに明け暮れ、剣は一流、酒とマージャンは1.5流。少々失礼かな。関西学生個人選手権フルール、エペの部優勝。サーブルの部準優勝。

松谷修敬(旧姓梅田)

とにかく超一流の女好き。両刀使いだが、どちらかと言うと肉剣の方が得意だっ

た。しかし口でのフェンシングは天下一品。

束田俊夫

通称「ツッカン」。いつもヌーボーとしてポーカークフェイス。剣もいつの間にか知らぬ内に勝っている音無しの剣。

昭和32年

岸田博文

通称「キッシャン」。ボディビルで鍛えた身体と真面目さが売物で関西学生リーグ戦エペの部初優勝の立役者。関西学生個人選手権フルール、サーブルの部優勝。

上田貞一

通称「テーボウ」。プレーヤーよりマネージャーとして2年連続大活躍、後援会発足にも頑張ったと同時に遊びにも…

中川祐之

通称「エースケ」または「ハッカイ」。呼称の原点は不明、物静かだが〜となると、すごくハッスル、良く遊んでいたな。関西学生個人フルールの部準優勝

山出茂輝

通称、特になし。流行のマンボスタイルでアルサロ通い。剣も流行のベルギッシュを握りしめ強引だった。

昭和33年

立花昭生

通称「たっちゃん」。「剣はその人の性格を表す」の通り、おとなしく、規格品通りの剣捌き。学生時代より兵庫協会、神戸YMCAの世話をしていたが、結婚後は、多くの卒業生同様に足を洗い、恐妻家になってしまった。関西学生個人フルールの部3位、サーブルの部準優勝。

吾妻幸昭(旧姓明石)

通称「アカシー」、「アカッサン」と先輩、後輩から慕われて部室をニギワシてい

た。試合振りはフェンサーというカッコの良い方ではなかったが、主務、関西学連委員長として名マネージャー振りを発揮していた。
一方、遠征先で膝をすりむいた有名な話の持ち主。

茂 苜 慶 三

風のごとく通り過ぎ、何処にいるのか分からない人。粘りのある変則的な剣の使い手。関大一高の監督を永らく務められた。大阪まで練習に来ていた工藤嬢と結婚、関大で最初のフェンサー同志の結びつきです。

昭和34年

山 本 久米雄

通称「ヤマ」。古市と共に一高フェンシング部の創設者。その戦法は種々様々な練習から現れた技巧派として、多彩な攻撃力、堅固な守備力を有し、入部後早くも31年度関西学生個人エペの部準優勝、32年度関西学生個人サーブルの部準優勝。

古 市 仁

通称「クロマイ」。自称「ハンサムのトミー」。その戦法は体当たりのだが、タイミングの良いストップヒットは「天狗飛び切りの術」、「弁天座り込みの術」と評され有名。三味線を弾きすぎるのが欠点。世話好きでリーグ8連覇の一番良い目をした監督。関西学生個人サーブルの部3位。

井 田 雄 亮

自称「男前の雄さん」こと「お茶くみの雄さん」。部内における良妻賢母の如き活躍は温厚な人柄と合わせて部員からよく親しまれた。3種目平均した実力を有し、特にサーベルのレッスンは無類の華麗さを見せた。

昭和35年

石 水 宏

通称「牛ちゃん」。現役きってのファイトマン。それにお天気やで、ミスジャッジ1本で試合を放棄する短所を持っていた。関西学生個人エペの部3位。全日本学生個人サーブルの部3位。

小 泉 健

通称「蛍光灯」又は「覗きのタケ」。サーベルに華麗なプレーと抜群の成績をおさめた。部内においても温厚な良き世話女房振りを見せた。

沖 田 信太郎

通称「チンタ」。三種目に平均した実力を示し、多種多様な練習による錬磨された技を保持し、リーグ戦の勝敗は彼の両肩にかかっている。家の忙しいのが玉にきず。関西学生個人サーブルの部準優勝。

村 田 謙 二

通称「カセ」。タイミングの良い果敢なアタックが持ち前。関西学生個人エペの部3位。主務としても部の発展に貢献した。

山 口 宗 一

通称「ケツ」。カセとコンビを組んで「ケツカセや!」。エペにおいて現役最高の技を保持しているが、気が良すぎるところがあり試合では苦戦をしいられる。関西学生個人エペの部準優勝。

昭和36年

籠 谷 治 夫

通称「ジャル」。三種目に平均した実力を持ち、特にエペにおいてはリーチをよく生かした攻防には目を引くものあり。3年次関西学連渉外委員、4年次委員長。新人戦準優勝、関西学生個人サーブルの部優勝。

昭和37年

芽 木 正 弘

通称「ツブシの太子」。練習に対する態度は真に真面目なもの有り。そのリーチをよく生かし、フォイルはもとよりエペにおいても将来が楽しみ。自称「二色浜の皇太子」とうるさかった。関西学生個人エペの部準優勝。

小 島 一 晃

通称「カーチャン」。現役中でも指折りのテクニックを持ちながら気の弱さが災い

している。これさえなければ関西屈指の選手になろう。

新人戦5位入賞。

森川 忠 男

通称「ガイマン」。現役中において最もタフの持ち主で、部内大会その他の試合においてもダークホース的存在。しかし、時々秋の空となるのが玉に傷。

尾 崎 功

通称「パキスタン」。六尺豊かの大男。リーグ戦においてもかなりの成績を残し、将来を有望視される。練習時は大声で部内励まし、少しうるさい存在。下級生にとっては赤信号。勝ち気にはやるのが欠点。

池 川 誠 治

通称「ニギリ」。フルールにおいては高校からの経験で試合にも慣れ、リーグ戦でも五分に戦い、人間的にも角がとれ、それが剣に現れていた。

森 田 良 祥

通称「ガマツチ」。新人戦では入賞を逃したが、その闘志はすごいものがあり、また、サーベルでは上級生をしのぐもの有り。主務をよく助け走り回っていた。

吉 富 善 助

通称「デンスケ」。数少ない部員の中において伝統あるサーバーを受け継ぐ者の一人。だが今一つファイトに欠ける。特技としてセゴビアばりのポピュラーギターが…！

昭和 38 年

小 林 一 夫

何かにつけて器用者。理屈をこねればNo.1。頭の回転最右翼。こんな弁護士如何なものか？

村 上 正次郎

春合宿、夜行列車にS君と、郵便車に乗り込み寝込んだ弥次喜多は、福知山駅で切

り離され、おっとり刀で練習会場へ駆けつけ、大目玉。将来は大物確実。

昭和 39 年

上野山 建 弥

通称「ウエサン」。部始まって以来の練習の虫。故にクラブ黄金期の初代主将。また、他県への指導も活発で、関大フェンシング部をアピールする。王座フルール優勝、インカレフルール準優勝。

猪 俣 敏 春

口は重いが名マネージャー。面倒見が良いためか、ユニフォームも先輩からのお古。無類のマージャン好き。故に誰がつけたか通称「イソコ」。

石 橋 義 秀

当時の部では珍しく女性に優しい。一見真面目人間。試合で負ければ「スマン、スマン」が口癖。

徐 正 富

大変特異な性格で、学生時代OBを含めて先輩は全て友達として付き合い、それが許された只一人の人でした。残念なことに足の関節を痛め十分な活躍が出来なかったが、OBになった後、現役の面倒をよくみていた。

昭和 40 年

近 藤 道

通称「ドンコ」。親分肌。180を越える長身だが接近戦が得意。合宿納会では下級生を使ってOBイジメ。全日本学生個人フルールの部準優勝、エペの部3位。関西学生個人フルールの部3位。リーグ戦フルール20連勝の記録の持ち主。

唐 崎 武

通称「カラコ」。優等生タイプ。口数が少ないがマネージャーとプレーヤーを両立し、きっちりと仕事をこなした。

奥野英雄

通称「ハナ」。我が部マイカー族のはしり。体育館前まで愛車を横付け、部員の羨望的。大学対抗サーブル3位。

昭和41年

定本博

通称「サダ」。この人の「鬼のレッスン」には定評があり、下級生には恐れられた存在。だれもが一度は泣かされたはず。関西、王座、大学対抗（フルール）3冠達成。関西学生個人サーブルの部2年連続優勝、フルールの部2位、全日本学生個人サーブルの部、2位、3位。

日下棟之

通称「ヨタロー」。万能タイプ、何をやらせても卒なくこなす。練習も、マネージャーも要領よく…。

金倉義明

当時只1人の下宿生活。時計とカメラは質屋通い。クラブ生活の後半はスタミナぎれ。

矢野朋寛

一見目立たない存在だが、練習の姿は逆。ゴーイング・マイ・ウェイスタイル。

昭和42年

綿榎祥二

マージャンの豪放さとは反対に、剣技は固かったがキャプテンになり目覚める。誰からもすかれるタイプ。

鹿間詮

練習もマネージャー業も一生懸命、元来の真面目さが不幸か、上級生からは只1人怒られ役。遠征、合宿等の食事マナーは立派の一言。

庄司翼也

通称「ポンタ」。1週間に一度は餃子を食べるため、練習中はニンニクの臭いで皆バンザイ。納会での酒量は部一番。

多造勲

同学年7人各々個性のある中で、最も静かな男。あまり声を出さず、話しかけると目元を赤く染めて答え、黙々と四年間練習を行なった。

寺内武夫

小柄な身体ながら、当時の猛練習を負けん気と努力で克服、体育会本部役員としても活躍。

黒田正宏

高校時代サッカーの選手で、大学に入りエペマンで四年間を通した。体が強く独特なクロウチングスタイルで3年より試合に出場して関西リーグ優勝の力となった一人でした。

昭和43年

藤田博

通称は会報と同じ「なまず」。いつも無精ひげを生やしていたのでこの名がついた。我が部最初のユニバシヤード出場選手。この人にレッスンをとってもらおうと、強くなったと錯覚するほど不思議な力を持った人。優秀な戦績多数あり。

中西克彦

現役時代は、先輩も一目置くほどの名マネージャー。推薦選手獲得に、合宿地の下見にと、日本全国を行脚された。忙しいかわら練習にも熱心で、サーブルでの活躍が顕著であった。

昭和44年

桑田博文

気が優しくて面倒見の良い人物。基本的に忠実な本当にきれいなフェンシングをするフェンサー。4年生の時、6連覇が危うくなり、丸ボーイズになった。